審査の結果の要旨

氏名　石黒 千晶

本論文は，他者の美術作品を鑑賞することで表現の触発が生起する際の心的過程を検討し，その知見に基づき触発を促す教育実践を開発することで，日常的に芸術活動に親しむ創造的教養人を育成するための方法を提案することを目的としている。

第Ⅰ部の序論に続き，第Ⅱ部の研究 1 では，鑑賞や触発の先行研究をもとに，鑑賞による表現の触発の心理過程に関する理論的モデルを構築した。このモデルでは，鑑賞から表現の触発に至るためには，自己と他者の表現を関連付けたり，他者の作品から解釈した新しい価値を自分が達成可能か否かを評価したりする過程が重要であると指摘している。

研究 2 では，研究 1 のモデルに基づいて，その過程に影響する要因として個人の特性要因（美術活動経験と表現への自己評価）と鑑賞過程，鑑賞する作品スタイルに焦点を当て，それらがどのように表現の触発に影響するかをインターネット調査により実証した。その結果，芸術を専門としない市民の鑑賞による表現の触発には，美術活動経験，表現の自己評価や他者作品の創作過程の評価，自分と他者の表現の比較といった鑑賞過程が影響していることがわかり，研究 1 のモデルの中心的な仮説が実証された。

以上の 2 つの研究から，鑑賞を通して市民の表現の触発を促進するには，美術経験を増やすことの他に，(1) 表現への自己評価を高めること，(2) 他者の作品の創作プロセスを評価する鑑賞，(3) 自分と他者の表現を比較する鑑賞が重要であることが明らかになった。

第Ⅲ部では，芸術教育による触発の促進や，触発の素地となる態度の獲得について検討した。研究 3 では，芸術教育が外界や他者による触発や，触発の素地の獲得に有効であるか否かを検討するため，芸術専攻の大学生と非専攻の学生を比較した。その結果，芸術専攻の学生は外界や他者による触発を経験する頻度や強度が非専攻の学生よりも高く，触発の素地となる表現への自己評価や他者作品の創作プロセスを評価する鑑賞態度，および，自分と他者の表現を比較する鑑賞態度も非専攻の学生よりも高かった。

研究 4 では，触発の素地を支える知識や能力を獲得させたり，外界や他者による触発を体験させたりする教育介入を含んだ芸術教育実践を実施した。その結果，触発の素地となる知識や能力が獲得され，他者作品の鑑賞やその後の省察過程で，自分と他者の表現を比較し，自分の表現へどのように発展するかを考えるようになったことがわかった。さらに，1 年後の追跡インタビューの結果，多くの学生が写真撮影を継続し，そのうちの半分が芸術表現としての写真撮影を継続していたことがわかった。

以上の研究を通して，本論文は，鑑賞による表現の触発のためには鑑賞過程で自他の表現を比較することが重要であり，そのためには，自分とその作品との関連性を評価したり，新しい表現のアイディアが自分に達成可能かを評価したりすることなどが重要であることを明らかにした。この知見は，先行研究で触発過程の内，inspired by と呼ばれていた側面（Thrash & Elliot, 2003, 2004）を明らかにしたものであり，「自然に沸き上がった」とか「降ってくる」などの芸術創造における inspiration のイメージを覆すものであると言える。また，本論文は触発を促進するための新しい教育方法を提案した。そのように，触発という独自の観点から理論的・実証的・実践的な美術教育研究を行い，美術教育への新たな研究の可能性を拓いた点は高く評価できる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに、十分にふさわしい水準にあると判断された。